

「Liver Biopsy Interpretation」

Author: P. J. Scheuer

日本肝臓学会理事長・慈恵医大教授
高 橋 忠 雄

この本の初版は 1968 に刊行された。当時一読して、その行文のきわめて簡潔で要を得ていることと、多くの図譜と相まって、著者の序にもあるとおり、肝生検を熱心に行っている臨床医だけでなく、剖検材料を主として扱っている病理学者にとっても、きわめて適切な生検標本解説の書であると思った。その翌年の秋ウィーンの学会でこの著者に会ったとき、この本が日本でも大いに歓迎されていることを話した。彼は大変喜んで、ぜひよりよい第2版を出すよう努力したいといていた。それがここに実現したわけで、さっそく初版と見くらべながら読んでみた。

この本は 15 章から成り立っている。はじめの 3 章は総論、手技および正常肝の所見について述べられている。その次にこんど新しく加えられた章として、小葉構造、虚脱、線維化、肝細胞壊死、炎症病変、胆汁

うっ滞などをどのように解釈すべきかが、簡潔に述べられている。あとは種々の肝・胆疾患についての各論が続いている。

急性肝炎と慢性肝炎の章は、最近のこの疾患についての知見の進展を反映して、かなり書き改められ、挿図も増加した。Scheuer は急性・慢性肝炎および肝硬変(胆汁性肝硬変、ウイルソン病、ヘモクロマトーシスを含めて)においては、鍍銀(レチクリン)染色を愛用している。これは小葉パターンの保持の有無、虚脱ないし線維濃縮および膠原線維の伸展などをとらえるには最も適している。肝疾患の予後と強く結びつく所見としての重要な項目の把握に資するところが大きいので、この点も私は全くその感を同じくしていることである。

著者の Scheuer 博士は、現在ロンドン大学附属の Royal Free Hos-

pital に在籍する病理学者で、まだ 40 代の若い人であるが、肝疾患の病理学では、現在ヨーロッパでもっとも発言力を持つだけの、経験と研鑽の歴史を持っている。彼の先輩であり師である、Prof. Sherlock が序文に述べているように、この本は肝生検について知らねばならぬことは、すべて網羅しているといつてよいと思う。それにもかかわらず、できるだけコンサイスな型でという著者の努力で、ページ数で初版より約 30 ページ、挿図で 23 図を増したが、それでも総ページで、171 ページというワクの中にまとめられていることにも、敬意を表したいと思う。肝臓に興味を持つすべて臨床家と病理学者に、心から推賞したい好著といつてよいであろう。

177 pp. 112 figs. 2nd ed. 1973
¥ 5,280 Baillière Tindall, London
日本総代理店・医学書院洋書部